

利根川下流を知る

～舟がつなげた川と暮らし～



関東地方整備局
利根川下流河川事務所

利根川舟運の魅力

利根川は、またの名を「坂東太郎」と言います。古くは相模国の足柄山・箱根山以東を坂東と呼んでおり、利根川は坂東随一の河川であったことから、日本の河川の長男としてこのように呼ばれ、親しまれていました。

江戸時代以前の利根川は東京湾に注いでいました。幕府が開かれてからの江戸は、人口が急速に増え、衣食住を中心とする物資の需要が急増しました。徳川家康は、江戸を水害から守ること、水上交通網を確立することを主な目的として、利根川の東遷事業に着手しました。利根川の改修により多くの荷物や人が利根川を介して江戸と行き来するようになり、沿川には多くの河岸が発達し、江戸の繁栄を支えるとともに、舟運により地域経済の発展を促しました。さらに、江戸時代には東国三社詣などで多くの参拝客が訪れ、明治時代以降も近代河川舟運の航路として賑わいました。

島崎藤村は、紀行「利根川だより」の中で、「利根は漾々として平野の間を流るる大河なれば、木曾川の奇もなく、天竜川の壮もなければ、水静かにして旅人の心を引くこと多し」と、利根川下流の船旅の魅力を書いています。

戦後、鉄道や道路の発達により舟運は衰退しましたが、現在においてもかつての舟運繁栄の名残を随所に見ることができます。また、利根川は流域面積日本一の大河川であり、歴史的な価値だけでなく、豊かな自然や現代的な新たな魅力も多く、舟運による地域連携の取り組みも始められています。

江戸東京を支えた豊かな水空間、利根川。現在において舟運を通して利根川の歴史や自然、街や人を見ることは、きっと新たな発見や感動に繋がることでしょう。

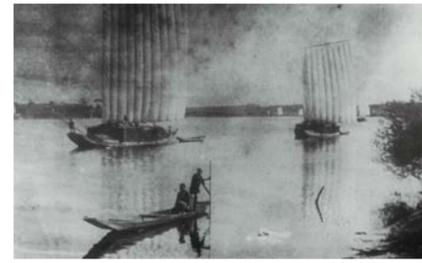
利根川の東遷



江戸時代以前の利根川は、鬼怒川・小貝川とは水系が異なっており、荒川と合流して東京湾に注いでいました。

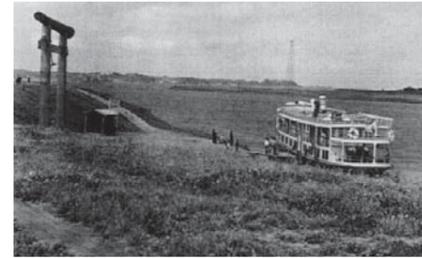
1590年に江戸に入府した徳川家康は、江戸を洪水から守ること、新田開発、舟運路の確保などを目的として、利根川を東に移す大改修工事に着手しました。これが、希代の土木工事といわれる「利根川の東遷」です。

江戸時代初期の約60年間に集中的に行われたこの河川改修は、江戸を100万人都市として繁栄させたとともに、徳川幕府の財政基盤の確立に大きな役割を担いました。



明治末期頃の布佐を遡行する高瀬船
(写真提供：我孫子市教育委員会)

江戸時代の利根川水運の主役は高瀬船とよばれる大型の川船でした。船の長さは最大で30mほどのものもあり、一度に1,000俵程度の米を積載することができました。このため、当時の利根川は流域各地と大消費地江戸とを往来する高瀬船で賑わいました。大きな帆に風を受けながら航行する高瀬船は利根川の風景の美しさを一層際立たせるもので、数多くの錦絵に描かれています。



水郷の女王「さつき丸」(昭和10年)
(「ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 佐原・小見川・神崎」(国書刊行会)より転載)

昭和10年に撮影された、さつき丸の津宮寄港時の写真です。昭和6年に就航した、当時としては画期的なディーゼルエンジン搭載の大型船で、土浦や潮来、佐原、鹿島を行き交い、多くの観光客を運びました。



佐原の汽船発着所に停泊する蒸気船
(「利根川勝地案内」(物流博物館所蔵))

明治時代に入ると西洋の技術が導入され、各分野で近代化が図られました。利根川の水運においても、明治10年に外輪蒸気船通運丸の第1号が登場しました。全長22mで、船体の両側面につけた水車を回転させて進みました。明治23年に利根運河が完成すると、銚子と東京の間を約18時間で結びました。白帆の高瀬船を横目に航行する通運丸に、当時の人々は文明開化を実感したことでしょう。

利根川舟運では、通運丸の他にも、銚子丸や永島丸などの外輪蒸気船が活躍しました。



現在的大型遊覧船

昭和62年に就航した86名乗りの大型遊覧船で、霞ヶ浦から利根川の水郷地域のクルーズに活躍しています。宴会や結婚式などの貸し切り運航も可能です。

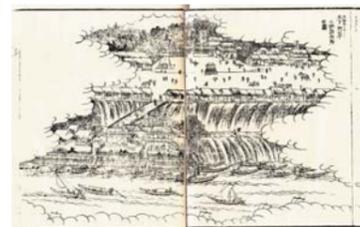
各地域のクルージングマップの凡例

①	地域の資源であり右ページに解説文があります。		利根川及びその周辺地域の補足的な説明です。
	船から見える利根川の見どころであり、左ページの下に解説文があります。		野鳥に関する情報です。

「利根川図志」に描かれた当時の河岸の様子

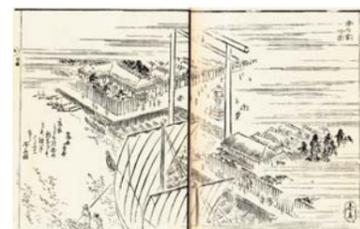
「利根川図志」とは

しろうさ 下総布川の赤松義知(宗旦)著による江戸時代の地誌で全6巻から成ります。利根川水源から銚子の河口に至る沿岸の名所、産物、旧跡などが、挿絵とともに詳細に記録されています。



木下河岸三社詣出舟之図

木下街道の陸路と利根川舟運の結節点であった木下河岸は、銚子からの物資輸送や香取、鹿島、息栖の参詣道として大いに栄えました。
(「利根川図志」(岩波書店)より転載)



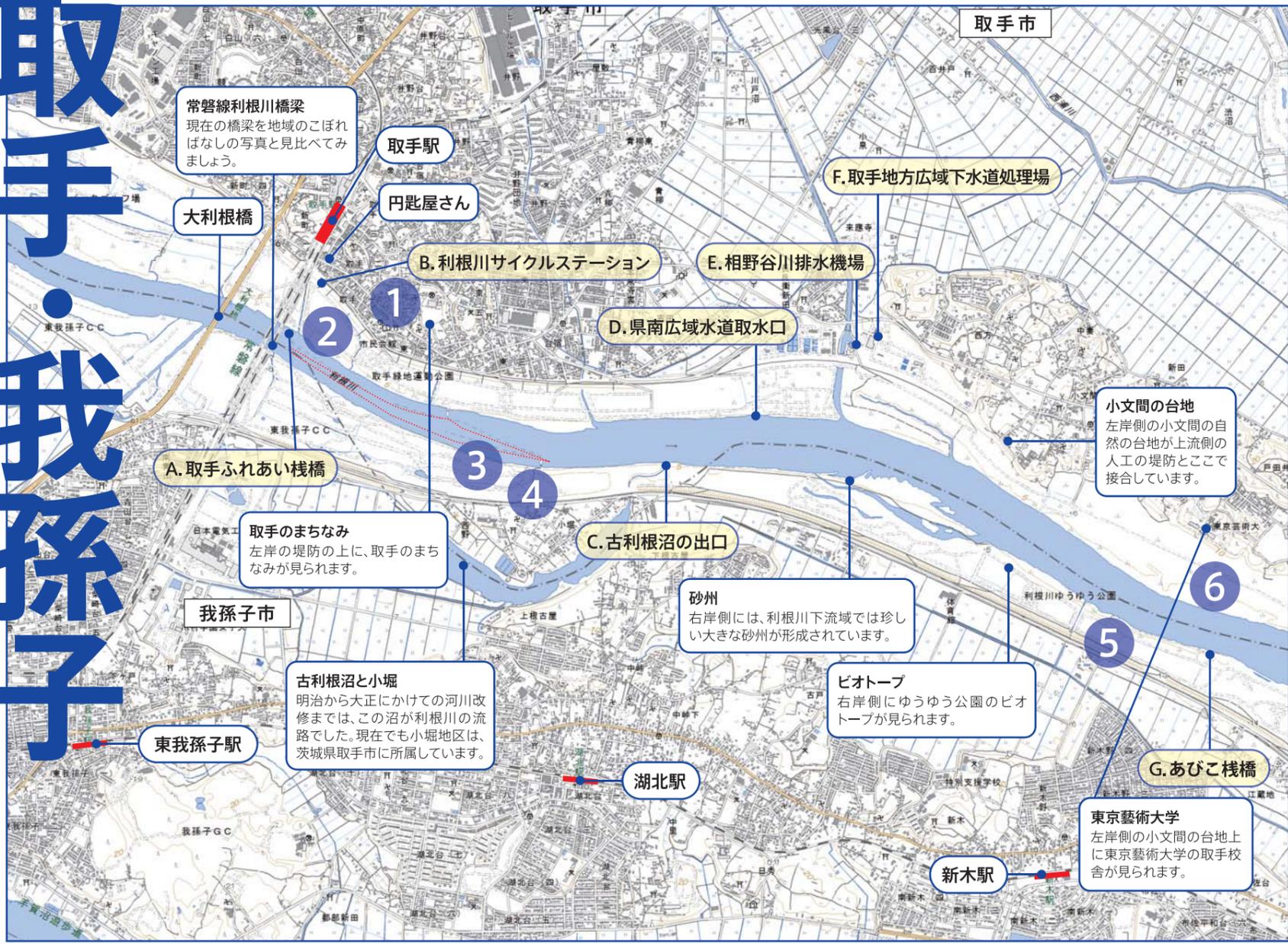
津宮河岸

香取神宮の一の鳥居が建つ津宮河岸。図絵に描かれた料理屋や旅館といった往時の賑わいは今は見られないものの、一の鳥居は健在です。
(「利根川図志」(岩波書店)より転載)



0 5 10km

取手・我孫子



船から見える利根川の見どころ



A. 取手ふれあい棧橋
オレンジ色の4本の柱が特徴的な棧橋。利根川の水位に応じて棧橋と斜路が上下動するようになっています。また、小堀の渡しの船着場にもなっています。隣接する防災船着場の壁画は、平成12年に白山(はくさん)小学校6年生により描かれた作品です。



B. 利根川サイクルステーション
利根川や小貝川の堤防上にはサイクリングロードが整備されており、常磐線橋梁横のサイクルステーションにて自転車を借りて楽しむことができます。小堀の渡しは自転車を載せることもできるので、舟運とサイクリングをセットで楽しむことも可能です。



E. 相野谷川排水機場
相野谷川は、取手市下高井地先に発し利根川に合流する茨城県管理の1級河川です。相野谷川排水機場は、利根川と小貝川に挟まれた流域での、洪水時における内水排除を目的に建設されました。
※排水機場の役割はP9の説明をご参照ください。



C. 古利根沼の出口
古利根沼は、明治末期、度重なる水害をなくすために利根川の改修工事が行われた結果、蛇行部分が残ってできた沼です。古利根川があったところは現在は土地改良区の樋管があります。



F. 取手地方広域下水道処理
クリーンセンターが中にあります。下水管によって集められた汚水が下水処理施設によって処理され、利根川に放流されます。
(写真は排水口)



G. あびこ棧橋
平成22年に完成した新しい船着場です。利根川ゆうゆう公園の岸辺にあります。



1 取手の町と旧水戸街道
取手には、江戸時代に参勤交代の通り道だった旧水戸街道が通っており、その際の宿である本陣が設けられ宿場町として栄えました。取手の町には現在も、重厚な入り母屋造りの本陣の建物や醤油醸造の土蔵、酒造店など旧街道時代の面影が残っています。



2 鮭地蔵
JR常磐線鉄橋から下流に100mほど歩いた辺りには、鮭地蔵と呼ばれる地蔵があります。江戸時代、やや下流の布川あたりの狭窄部では鮭が多くとれました。「利根川図志」ではその鮭は布川鮭と呼ばれ、利根川一美味であると述べられています。この鮭地蔵の名前の由来は、鮭の霊を供養するために建てられたためであると言われています。



3 小堀の渡し
利根川の改修によって取手市小堀地区が川によってへだてられてしまったことにより、住民が渡し舟を始めてから80年以上がたちます。現在は取手市で運航されており、定員12名、自転車、バイクも乗船可能、水曜日を除き、午前9時～午後4時まで小堀側を出発し、取手側緑地運動公園サッカー場前と取手ふれあい棧橋の3箇所を運航しています。
無料で乗船出来る条件は、①小堀居住者②12才未満の子供・70才以上の方③乗船に介護が必要な方で、それ以外の方は1回100円で乗船可能です。



4 小堀地区の河川改修
取手市小堀地区は、利根川の千葉県側に茨城県が入り込んでいる珍しい箇所です。このような県境になったのは、河川改修による利根川の河道変化が関係しています。
昔の利根川は小堀地区の南を蛇行して流れており、小堀地区は取手と地続きでした。しかし度重なる洪水を防ぐため明治末期から大正にかけての利根川改修工事で川筋の直線化が図られ、小堀は右岸側に取り残される形になりました。こうして現在の小堀地区と「古利根沼」が生まれたのです。



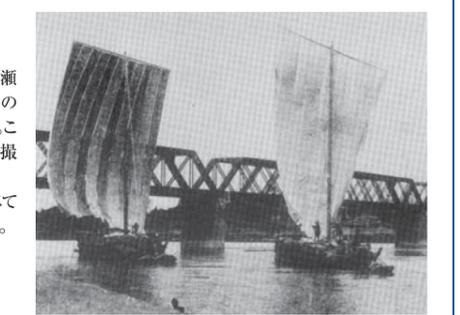
5 利根川ゆうゆう公園
利根川河川敷内沿いに約4.5km続く利根川ゆうゆう公園は、国土交通省と我孫子市が連携して平成14年度から整備を進めてきました。それぞれの目的にあわせた4つのゾーンに分かれており、下流側から順番に、自然緑地ゾーン、ファミリーレクリエーションゾーン、スポーツゾーン、自然観察ゾーンとなっています。
自然観察ゾーンは、3つの異なったピオトープで構成されています。ピオトープとは、生き物がありのままに生息活動する場所のことをいい、ピオトープ内には人の立ち入れない保全エリアがあります。平成17年5月にオープンしました。



6 小文間付近の河川敷
相野谷川が利根川に合流する河川敷一帯はヨシ原が広がり、野鳥観察のポイントとなっている他、ハンノキやオニグルミの群生地としては利根川下流域では大きな規模のもので、また小文間周辺は、利根川下流域としては珍しく堤防がありません。代わりに高さ20mほどの台地がせりだして、それが自然の堤防としての役割を果たしているのです。
このように丘陵地に接するところを山付堤と呼びます。

地域のこぼればなし

常磐線橋梁と高瀬船
右の写真の2艘の高瀬船の後ろに写っているのは、常磐線の鉄橋です。この写真は、大正時代に撮影されたものです。現在の鉄橋と見比べてみるとおもしろいでしょう。



えんぴ 円匙屋さん
えんぴとは和風スコープのことで、その製造・卸し・販売を営んでいる会社があります。創業約150年の老舗で、特に明治期の利根川の改修の際に沢山使われ、製造のための良質の鋼を優先的に分けてもらったそうです。
プロの農家の他に、最近では家庭菜園やガーデンニングを行っている人の購入も増えているとのこと。店舗には、製造中に少し傷がついてしまったアウトレット商品も置いてあり、一見の価値があります。



取手・我孫子
布川・布佐・木下
河内・米
金江津・滑川
押砂・神崎
佐原・香取
息栖・小見川
東庄
矢田部・桜井町
波崎・銚子

布川・布佐・木下



船から見える利根川の見どころ

A. 布川水位・流量観測施設
 栄橋下流に位置する布川は利根川下流部の河川の水質、流量、水質の基準となる地点として、常時自動観測しています。水面両岸に建つ赤色の施設が流量観測施設です。なお、リアルタイムの水質情報は携帯電話からも見られます。(http://i.river.go.jp)

B. 木下取水樋管
 千葉県水道局の取水口です。取水した利根川の水は、北総浄水場へ送水し、浄水加工の後、千葉市などの各家庭へ供給されています。水道用水としては千葉県最大の取水口で、日当たり約36万㎡(25mプールで約900杯)の水を利根川から取水しています。

C. 北千葉揚排水機場樋管
 利根川から見える北千葉導水の揚排水機場樋管です。手前にある柵は魚やゴミが入ってこないようにするためです。

北千葉導水事業
 利根川と江戸川を結ぶ28.5kmの導水路を北千葉導水路と呼び、大雨による浸水被害を少なくしたり、手賀沼の水質改善のため浄化用水を供給したり、東京・埼玉・千葉で飲み水が足りなくなったときに利根川の水を供給することができます。利根川下流河川事務所のホームページでは、この導水路の運転状況の速報値が公開されています。

内水排除 浸水被害から街を守ります。
都市用水の供給 暮らしに必要な水を確保します。
水質浄化 手賀沼の水をきれいになります。



1 ハクレンのジャンプ
 ハクレンとは中国原産のコイ科の淡水魚で、日本に移入された帰化動物であり、利根川での繁殖が確認されています。産卵期に集団で豪快な大飛躍をすることが知られており、小貝川との合流部では、5～9月頃ハクレンのこのジャンプを見ることができます。



2 布佐河岸と「なま街道」
 江戸時代初期から明治時代初期にかけて、銚子沖で水揚げされた鮮魚は、利根川が濁水期には途中の布佐河岸で荷物を馬に積み替え、陸路を通り、再び江戸川により日本橋まで船で運び入れました。この陸送した区間全長約七里半(約30km)の道を「鮮魚(なま)街道」と呼びます。布佐河岸はその「なま街道」の出発点として栄え、高瀬船や蒸気船で賑わいました。「鮮魚街道」は「轟街道」とも書かれました。



3 琴平神社の相撲と小林一茶
 布川の琴平神社境内には、「べったりと人のなる木や宮角力」という句碑が建っています。これは当時の琴平神社の奉納相撲の賑わいぶりを詠んだもので、小林一茶直筆の句が彫られています。今でも9月の後半に伝統行事「琴平神社奉納相撲」が行われます。小林一茶は他にも、享和3年(1803)に布川を訪れた際、琴平相撲を見物し「正面は親の顔なり負け相撲」の句を残しています。



4 栄橋と川施餓鬼
 栄橋付近では夏になると、河川敷で利根町の納涼花火大会と川施餓鬼が行われます。川施餓鬼とは、利根町で毎年8月17日以降の最初の土曜日に行われる灯籠流しのことで、利根川で命を失った人の霊を供養するために始まったと言われています。その年に亡くなった人の霊を供養する家族が栄橋下の利根川に船を出し、思い思いに灯籠を流すと、川面には幻想的な雰囲気漂います。



5 利根町立柳田國男記念公園
 日本民俗学の創始者として知られる柳田國男は明治20年、12歳の時に故郷の兵庫県を離れ、利根町布川で医院を開業していた長兄のもとに身を寄せていました。この時期に「利根川図志」などに接したことが、後の柳田民俗学の素地になったと言われています。公園内には、幼少の國男が読書していた土蔵が資料館となっており、また地元の素封家として知られていた小川家の母屋が復元されて集会所として利用されています。



6 いんざいぶらり川めぐり
 「ぶらり川めぐり」は、風を感じる舟で六軒川・弁天川・手賀川をめぐる小さな船旅です。これらの川の周辺には様々な水鳥や魚などが生息しており、季節ごとに様々な表情を見せています。のどかな風景を見ながらゆったりと楽しむことができる水上散歩です。

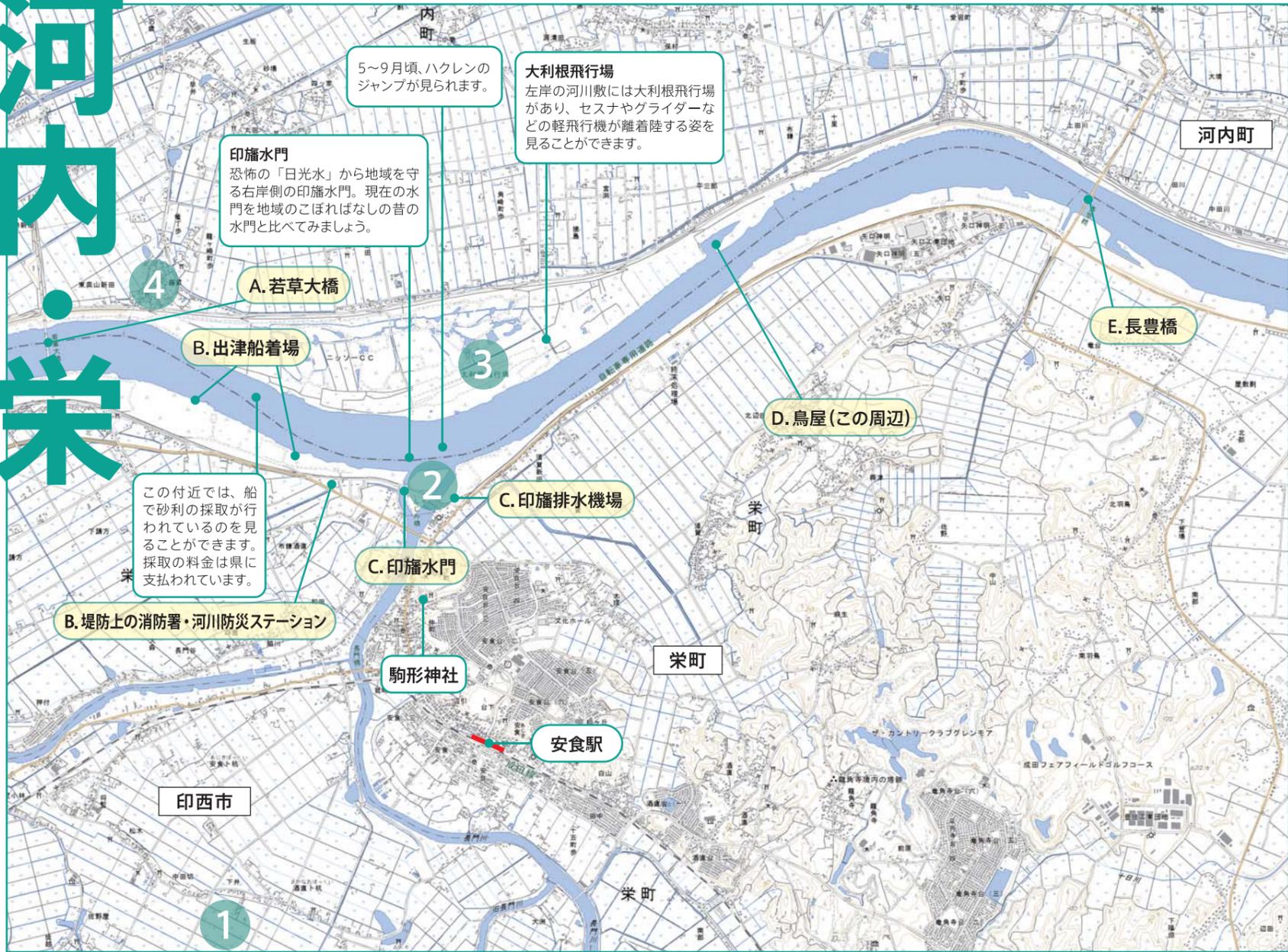
地域のこぼればなし

赤松宗旦と「利根川図志」
 赤松宗旦は、利根川流域の生活、伝承、地理、寺社仏閣などを調査し、詩歌、俳句、絵画を交えて記録した「利根川図志」の著者です。この著書は、民俗学の父ともいわれる柳田國男が少年時代に読み深く感動し、民俗学を志すきっかけとなった本です。現在、宗旦の旧居は布川の利根川に面した場所に復元され、町指定文化財として一般に公開しており、室内には、赤松宗旦の書いた利根川図志・銚子日記などの資料が展示されています。

布川水位・流量観測所の生みの親
 栄橋の下流右岸に見える赤い杭等は、布川の水質・流量観測施設です。この観測地点は、明治5年にオランダから来日した土木技師リンドによって量水標が設置された地点であり、利根川の近代治水事業の原点の一つと言えます。

取手・我孫子
 布川・布佐・木下
 河内・栄
 金江津・滑川
 押砂・神崎
 佐原・香取
 小貝川
 東庄
 矢田部・桜井町
 波崎・銚子

河内 栄



5~9月頃、ハクレンのジャンプが見られます。

大利根飛行場
左岸の河川敷には大利根飛行場があり、セスナやグライダーなどの軽飛行機が離着陸の姿を見ることができます。

印旛水門
恐怖の「日光水」から地域を守る右岸側の印旛水門。現在の水門を地域のこぼればなしの昔の水門と比べてみましょう。

A. 若草大橋

B. 出津船着場

E. 長豊橋

D. 鳥屋(この周辺)

C. 印旛排水機場

C. 印旛水門

この付近では、船で砂利の採取が行われているのを見ることができます。採取の料金は県に支払われています。

B. 堤防上の消防署・河川防災ステーション

駒形神社

安食駅

印西市

1

0 1km

船から見える利根川の見どころ



A. 若草大橋
2006年4月に開通した有料の橋です。千葉県栄町と茨城県利根町を結んでいます。長さは580mあります。



B. 堤防上の消防署・河川防災ステーションと出津船着場
栄町消防団本部と、河川防災ステーションが並んで建つ防災の拠点になっています。〈面積1.7ha、延長265m〉
河川防災センターは洪水時等の緊急対策本部や水防活動の情報発信基地として設置されました。
また、堤防から川岸へ降りたところと、その上流のグラウンド側には、出津船着場があります。こちらは栄町が管理しています。



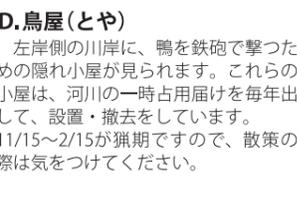
C. 印旛排水機場(左)と印旛水門(右)
利根川と印旛沼は、長門川を経てつながっています。印旛沼の水が不足した場合は、利根川の水を印旛沼へ揚水しています。また、降雨等により印旛沼が増水したときは、印旛沼の水を利根川へ排水しています。
※排水機場と水門の役割はP9をご参照ください。



D. 鳥屋(とや)
左岸側の川岸に、鴨を鉄砲で撃つための隠れ小屋が見られます。これらの小屋は、河川の一時占用届けを毎年出して、設置・撤去をしています。11/15~2/15が猟期ですので、散歩の際は気をつけてください。



E. 長豊橋
長豊橋を通る道路は、国道408号線で河内町長竿(ながさお)と成田市豊住(とよすみ)地区を結んでいるので、長・豊・橋となったそうです。長さは510mあります。



1
白鳥の郷と水塚
本笠第二小学校から南東に800mほどの水田では、毎年300羽を超える白鳥が飛来しており、多くの見物客で賑わいます。
また、近くには、洪水から住宅や生活用品を守るために、平地より高く土を盛り上げた上に土蔵や住宅を建てた、「水塚」と呼ばれる住宅が現存しています。
土蔵の外壁には、船を吊すための金具が残されています。



3
空へのロマン大利根飛行場
水田やハス田が広がる県内有数の穀倉地帯の茨城県河内町には、大利根飛行場があります。昭和40年に開設されたもので、海岸パトロールや緊急要請の救助などの他、日本モーターグライダークラブの活動や、パラシュートジャンプなどにも利用されています。



2
利根川を詠んだ句碑
栄町には利根川を詠んだ多くの句碑が建っています。もともと栄町は俳句が盛んなところで、そのため町に多くの俳人が訪れました。利根川と印旛沼を結ぶ長門川の合流点付近には、荒木東卓(あらかとうたく)の「菜の花や利根の堤の大曲り」の句をはじめ、栄町生まれの篠田麦子(しのだけくし)による「月の出の川面あ可るしくつわ蟲」の句や、茨城県藤代町(現取手市)出身の俳人、高野素十(たかのすけじゅう)が安食小学校の高台に立って詠んだ「夜振りの火方々に燃え沼に燃え」の句碑なども見られます。



4
藤蔵河岸の金比羅常夜燈
藤蔵河岸は、江戸時代に年貢米や諸物資の輸送で、明治29年の常磐線の開通まで繁盛しました。
常夜燈は航路標識として、また航海の安全の神をまつため水路の重要地点に建てられました。
藤蔵河岸の常夜燈は、1839年の建立、1868年に再建、1888年に再々建てられたもので、河川改修による幾度の移設の後、現在の位置に移されたものです。



東日本大震災 平成23年3月11日、東日本大震災が発生し、利根川下流河川事務所の基準点で震度6弱を観測しました。利根川下流部でも247箇所堤防などの河川管理施設が被災したことから復旧工事が行われました。

地域のこぼればなし

恐怖の「日光水」を制する
右の写真は、大正11年に竣工した印旛水門の竣工記念の絵はがきです。現在の水門と見比べてみましょう。
この地域の人は江戸時代から度々水害に見舞われ、鬼怒川から流れてくる白く濁った水を「日光水」として恐れられました。江戸幕府もその防止対策を考えましたがうまくいかず、大正6年に竣工した印旛水門によって、ついに大きな成果を上げることができたのでした。



(土木学会土木図書館所蔵)

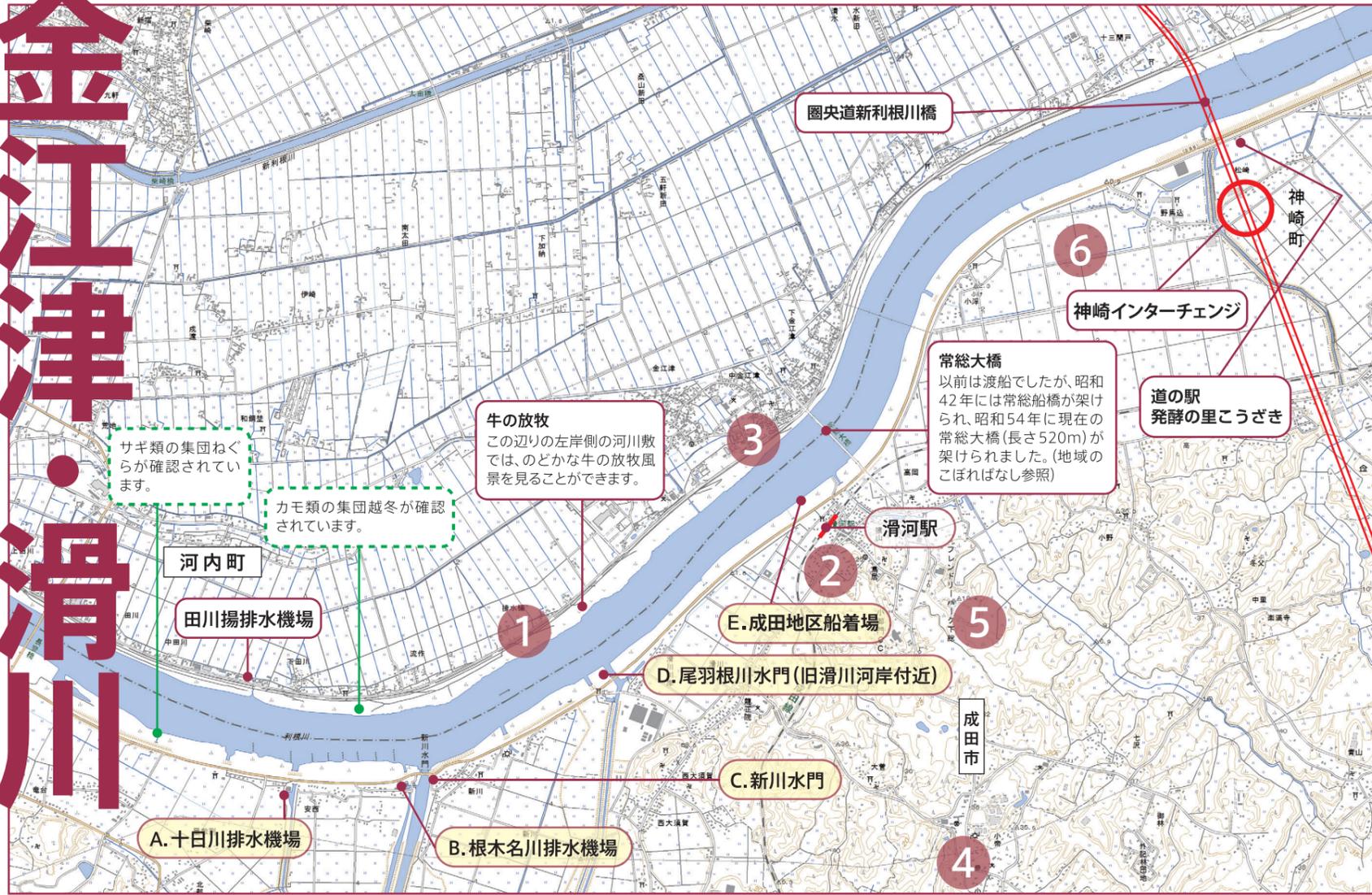


駒形神社拝殿

「安食」の地名と駒形神社
平安時代の末期、利根川の洪水によって食べ物に困った人々は、穀神を祀って駒形神社としました。以後、五穀大いに実り、食には安心していられるところから、地名を「安食(あじき)」と改めたとの伝承があります。

取手・我孫子
布川・布佐・木下
河内・栄
金江津・滑川
押砂・神崎
佐原・香取
息栖・小見川
東庄
矢田部・桜井町
波崎・銚子

金江津・滑川



船から見える利根川の見どころ



A. 十日川排水機場
十日川流域周辺には成田ニュータウン等住宅街があり、尾羽根川、根木名川が隣接しています。浸水した場合著しい被害を与えることになるため、十日川排水機場は洪水における内水排除を目的に建設されました。



B. 根木名川排水機場
根木名川流域には新東京国際空港や成田ニュータウン等があります。根木名川排水機場は利根川の水位上昇時における内水排除を目的としています。



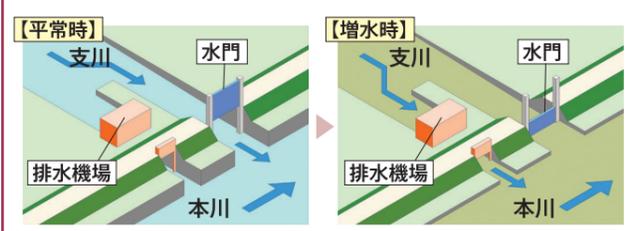
C. 新川水門
新川水門は根木名川との合流点です。根木名川の内水排除、利根川からの逆流防止を目的に設置された水門です。

D. 尾羽根川水門
尾羽根川水門は、利根川と尾羽根川との合流点にあります。尾羽根川は下流で派川根木名川と合流し利根川に注いでいます。



E. 成田地区船着場
平成22年に完成した新しい船着場です。常総大橋に近く、昼間は対岸に牛が放牧されているのを見ることができます。成田市が管理しています。

水門と排水機場の役割



普段、本川の水位が低い時は、水門を開けて、支川の水をそのまま本川に流すことができます。
大雨などで本川の水位が上がった時には、支川へ水が逆流しないように水門を閉めます。その時、支川を流れてくる水は、排水機場のポンプにより本川に排水します。



1 利根川河川敷での放牧
常総大橋から長豊橋にかけての左岸の河川敷では、乳牛がのんびりと草を食べている風景を見ることができます。放牧風景が見られるのは左岸ですが、多くの牛が放し飼いにされており、のどかな放牧風景が広がっています。



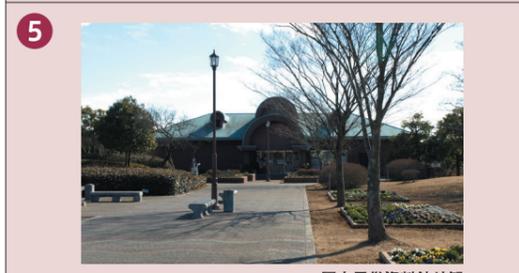
2 龍正院(滑河観音)
龍正院(滑河観音)は、平安初期の承和5年(838年)の開基で、坂東三十三観音第28番札所です。十一面観世音の本尊は延命・安産・子育ての守り本尊として多くの参詣者が訪れています。写真の仁王門は室町時代の八脚門で国指定重要文化財に、元禄11年(1698年)建立の八間四面の広大な建物の本堂は県の有形文化財に指定されています。



3 大洞院境内の曲流舎句碑群
河内町にある大洞院の境内には、幕末期の俳壇に大きな影響を与えた曲流舎海保可川の句碑が建っています。天保年間から明治にかけての海保可川にはまる曲流舎俳諧の往時をしのぶ史跡で、12基もの句碑が建っています。



4 小御門神社
小御門神社の境内は県内最大規模の常緑広葉樹林でおおわれ、「小御門神社の森」として千葉県天然記念物に指定されています。この森は小御門神社の社殿が造られた時に植栽された人工林が中心ですが、今では樹齢100年を超え、自然林への移行過程にある珍しい森です。



5 成田市下総歴史民俗資料館
歴史民俗資料館は、旧下総町の町制施行40周年を記念して平成7年に開館し、平成18年3月に新たに成田市の資料館となりました。ナウマン象などの下総地区で出土した考古資料や、民俗資料などを中心に約400点を常時展示しています。昔の農具や魚具などを通じて昔の人々の生活を知ることができる郷土の資料館で、利根川舟運に関する資料も多く展示されています。資料館の周りは広大な芝生広場を有する運動公園として整備されています。



6 成田市下総地区のレンコン
下総地区の特産品であるレンコンは利根川沿いの広大な田んぼで生産されています。微生物や良質な土などの有機物を使って栽培される下総地区のレンコンは、シャキシャキとした歯ざわり感と無漂白が売りで、市場などから好評を得ています。特に、5月末ごろから出荷されているハウスものは、生産量も少ないことから、高値で取り引きされています。

地域のこぼればなし

河岸で栄えた高岡村と常総船橋

現在の常総大橋の千葉県側には源田河岸が、新川水門付近には滑川河岸がありました。中でも源田河岸は、江戸時代には高岡藩や多古藩の米の集散地として、また、対岸の金江津河岸への渡し場として賑わい、明治時代には外輪蒸気船通運丸もここに寄港していました。昭和42年に架けられた常総船橋は、下流の神崎大橋の開通により不用となった神崎船橋を移設したものでした。



リユースであったが、柵が立派になり照明も設置された常総船橋(成田市所蔵)

利根川が造った犬吠埼灯台

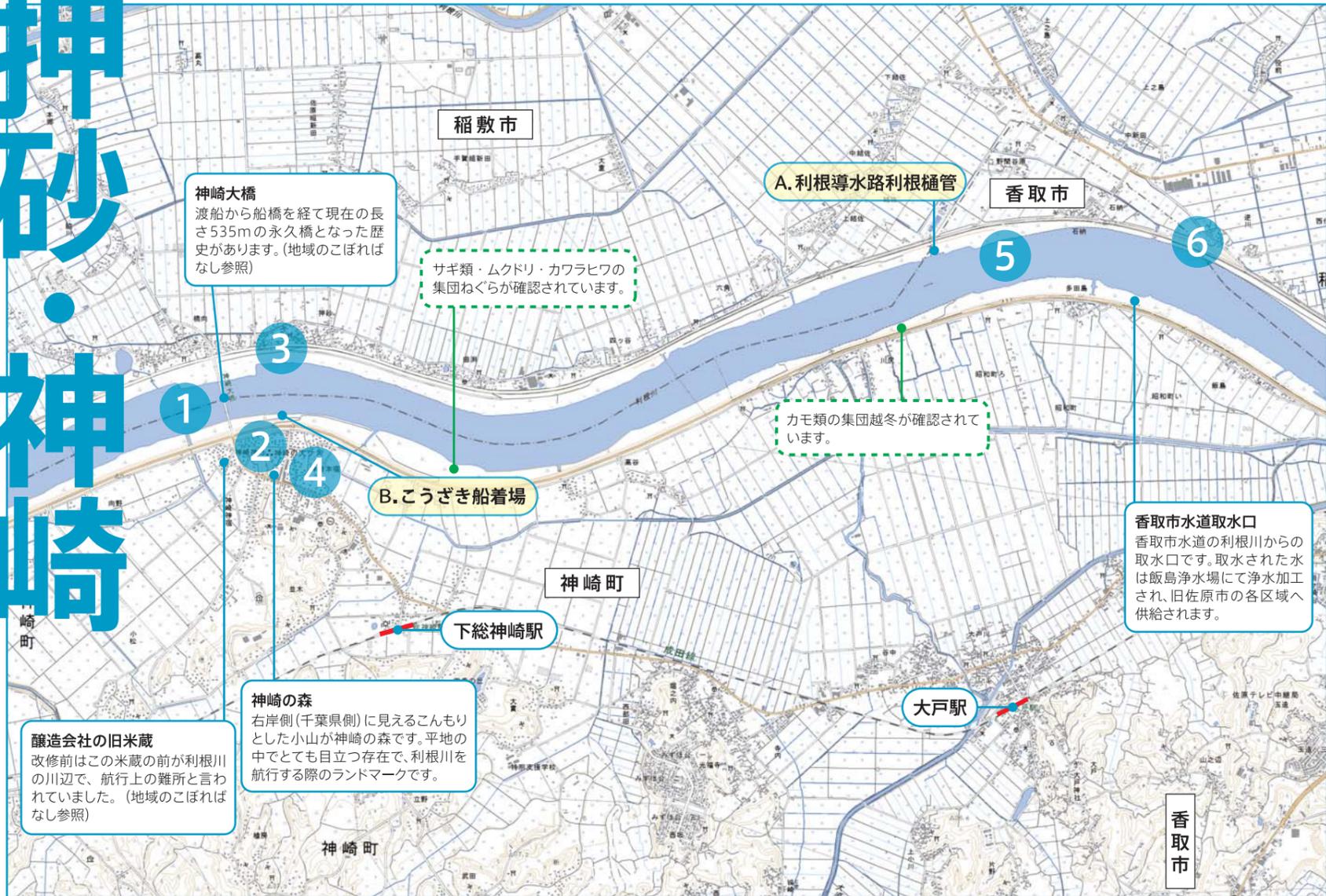
旧滑川河岸近くには、以前は9軒もの鬼瓦の工場がありました。利根川の氾濫によりもたらされた土は粒子が細かく、瓦に適していたのです。明治7年に完成した犬吠埼灯台のレンガも、滑川河岸のあった旧高岡村で焼かれたもので、灯台・官舎・倉庫に使われました。イギリスから招いたブランドン技師に国産レンガの使用を反対されながらも、内務省の中沢孝政技師が苦心を重ねて完成させました。竣工から130年以上経って灯台が健在であることから、その質の高さがわかります。



下総歴史民俗資料館の玄関脇に置かれた犬吠埼灯台旧官舎のレンガブロック。2002年に取り壊されたもので、イギリス積みで積まれて目地を漆喰で固められているのがわかる。

取手・我孫子
布川・布佐・木下
河内・栄
金江津・滑川
押砂・神崎
佐原・香取
息栖・小見川
東庄
矢部・桜井町
波崎・銚子

押砂・神崎



神崎大橋
渡船から船橋を経て現在の長さ535mの永久橋となった歴史があります。(地域のこぼればなし参照)

サギ類・ムクドリ・カワラヒワの集団ねぐらが確認されています。

A. 利根導水路利根樋管

カモ類の集団越冬が確認されています。

B. こうざき船着場

香取市水道取水口
香取市水道の利根川からの取水口です。取水された水は飯島浄水場にて浄水加工され、旧佐原市の各区域へ供給されます。

神崎の森
右岸側(千葉県側)に見えるこんもりとした小山が神崎の森です。平地の中でとても目立つ存在で、利根川を航行する際のランドマークです。

醸造会社の旧米蔵
改修前はこの米蔵の前が利根川の川辺で、航行上の難所と言われていました。(地域のこぼればなし参照)

0 1km

船から見える利根川の見どころ

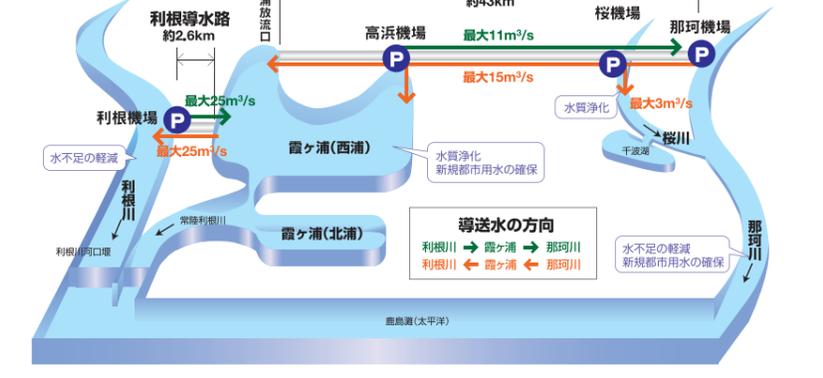


A. 利根導水路利根樋管
この樋管の奥に見える機場が霞ヶ浦導水事業利根機場です。霞ヶ浦と利根川を結ぶ流況調整河川で霞ヶ浦から最大25 m³/sの水を互いにやりとりできます。また霞ヶ浦開発事業の9 m³/sも送水する共同施設となっています。



B. こうざき船着場
平成22年に完成した新しい船着場です。同時期に完成した5箇所の船着場の中で唯一スロープがあり船の上げ下ろしが容易という特徴があります。神崎町が管理しています。

霞ヶ浦導水事業とは



那珂川、霞ヶ浦および利根川は、水資源の安定的かつ広域的な供給等に重要な役割を果たし、流域の産業・経済の発展に寄与してきました。しかし、産業の発展や都市化の進展によって、霞ヶ浦や水戸市を流れる桜川の水質汚濁、那珂川や利根川における濁水の発生など、さまざまな問題が発生するようになり、流域全体で水質浄化、安定した水資源の確保に向けた取り組みが進められています。

霞ヶ浦導水事業は、関東地方における水のネットワークを構成し、限りある水資源を有効に活用することにより、これらの問題の解決に貢献するものです。

事業では那珂川下流部、霞ヶ浦および利根川下流部をつなぐ地下トンネルを建設し、相互に水をやりとりします。それぞれの河川に必要な水量を残した上で、余裕のある水を有効に活用し河川の流況を改善します。



1 神崎大橋と側道橋「神東ふれあい橋」
神崎大橋は昭和42年5月に開通し、千葉・茨城間の通勤、通学、物流に大きな役割を果たしています。神崎大橋が架かるまでは船橋(船を並べて浮かべた上に板を張り、渡れるようにしたもの)が用いられていました。

また神崎大橋の側道橋「神東ふれあい橋」は、夜間の往来に配慮して手摺り部分に照明が設置されており、4箇所のバルコニーから雄大な利根川の情景を堪能することができるなど、町の新しい観光スポットとしても注目されています。



2 神崎の森と神崎神社
町の北端、利根川をのぞむ小高い神崎森の上にある神崎神社には、境内に「なんじゃもんじゃの木」があります。この木は水戸光圀公が「この木は何というもんじゃろうか」と自問自答したとされる伝承で有名な樟(クス)の木で、町のシンボルとして神社を訪れる人に親しまれています。



3 押砂の河岸
押砂河岸は中古の時代、大水になったとき砂が押し出されてきた土地であることから、「押砂」と名付けられたといわれています。このあたりは安波大明神(現在では阿波の大杉神社)に参詣するひとの通り道になっていました。

また「利根川図志」に「押砂河岸より神崎眺望の図」という絵があり、高瀬舟や宿屋、そして利根川をはさんで対岸に神崎の丘陵が描かれており、当時の押砂河岸は入船出船で賑わっていたことがわかります。



4 醸造のまち神崎
神崎町は利根川の水運に恵まれるとともに、良質の湧水を有することを背景に、江戸時代から明治時代にかけて醸造の町として栄えてきました。かつて神崎町には7軒もの造り酒屋がありました。現在も造り酒屋として続いているのは2軒だけになってしまいましたが、どちらの蔵も見学が可能です。

毎年3月には酒蔵まつりが盛大に行われています。



5 結佐付近の大幅な河川改修
結佐から神崎大橋までは河道が大きく曲がっている箇所があり、昔から利根川の難所として恐れられてきた所でした。しかし明治42年から大正4年にかけて大河川改修が行われ、大きく蛇行していた流れが直線に改められました。昔と比べて大きく河道が変化するため、当時と現在の河道図を見比べることで利根川改修による歴史を見ることができます。



6 大利根東公園
利根川の堤防上に整備された大利根東公園は、幅が約30m、長さが約500mの公園です。春にはチューリップ、夏にはボーチュラカなど季節ごとに花が咲き乱れ、子供たちが安心して遊べる遊具広場なども整備されています。また、駐車場とトイレが整備されており、ドライブの休憩の他、釣りやバードウォッチングなどの利根川の雄大な自然を楽しむ際の拠点としても利用可能です。

地域のこぼればなし

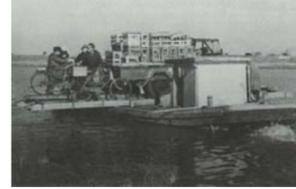
船の難所・神崎
明治から大正にかけての河川改修以前は、利根川の流は神崎の森で屈曲して逆巻き、船の難所として恐れられました。

昭和32年の改修以前の写真をみると、近代化産業遺産にも認定されている現存する旧米蔵のすぐ前が利根川であったことがわかります。

現在の利根川の位置と比べてみるとおもしろいでしょう。



対岸から見た神崎の森(神崎町資料)



町営渡船(左)と船橋(上)(神崎町資料)

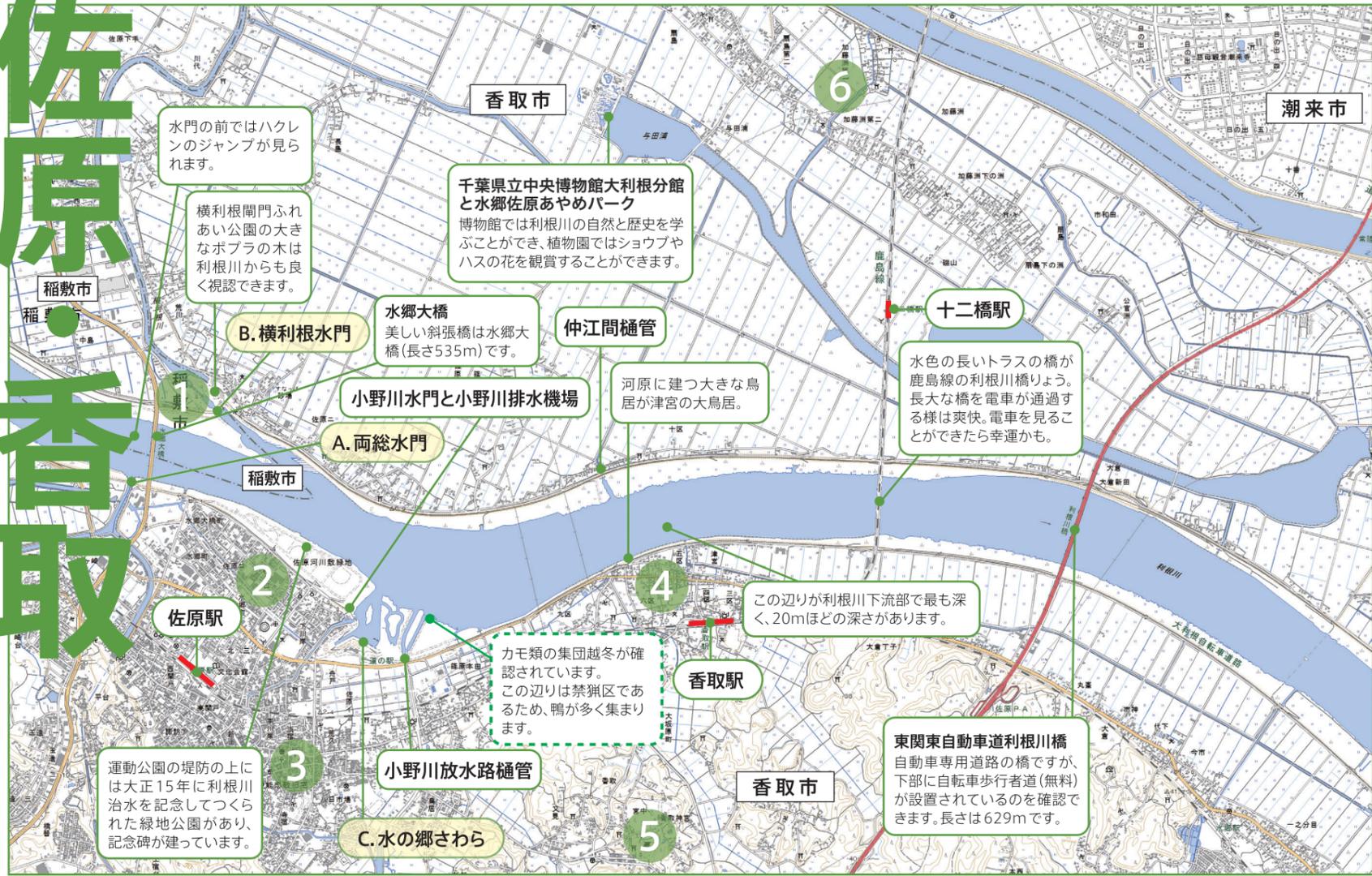


町営渡船(左)と船橋(上)(神崎町資料)

神崎の船橋
現在の神崎大橋は昭和42年に完成したのですが、昭和34年から完成までの8年間は、利根川に浮かべた船の上に路面を載せた船橋が利用されていました。この間、利根川が増水する時には船を外して横根まで避難させなければならず、その間は以前と同じように渡船が利用されていました。この船橋は、神崎大橋完成後、上流の常設船橋としてリユースされました。

取手・我孫子
布川・布佐・木下
河内・米
金江津・滑川
押砂・神崎
佐原・香取
息栖・小見川
東庄
矢田部・桜井町
波崎・銚子

佐原・香取



水門の前ではハクレンのジャンプが見られます。

横利根開門ふれあい公園の大きなポプラの木は利根川からも良く視認できます。

千葉県立中央博物館大根分館と水郷佐原あやめパーク
博物館では利根川の自然と歴史を学ぶことができ、植物園ではショウブやハスの花を鑑賞することができます。

水郷大橋
美しい斜張橋は水郷大橋(長さ535m)です。

仲江間樋管
河原に建つ大きな鳥居が津宮の大鳥居。

十二橋駅
水色の長いトラスの橋が鹿島線の利根川橋りょう。長大な橋を電車が通過する様は爽快。電車を見ることができたら幸運かも。

この辺りが利根川下流部で最も深く、20mほどの深さがあります。

東関東自動車道利根川橋
自動車専用道路の橋ですが、下部に自転車歩行者道(無料)が設置されているのを確認できます。長さは629mです。

カモ類の集団越冬が確認されています。この辺りは禁猟区であるため、鴨が多く集まります。

運動公園の堤防の上には大正15年に利根川治水を記念してつくられた緑地公園があり、記念碑が建っています。

小野川放水路樋管

C. 水の郷さわら

0 1km

船から見える利根川の見どころ

A. 両総水門

両総水門は千葉県の水の供給に大事な役割を果たしています。米所、九十九里平野は大きな川がないため昔から干ばつに見舞われていたが、今ではこの両総水門から農業用水の確保をしています。また、遠くは南房総(鴨川・館山)へ水道水、臨海工業地帯で有名な内房(市原・袖ヶ浦)へは工業用水として供給されています。両総用水の取水量は県内最大規模で農業用水を14.47m³/s、房総導水路9.776m³/sを併せて24.246m³/sを取水しています。



B. 横利根水門

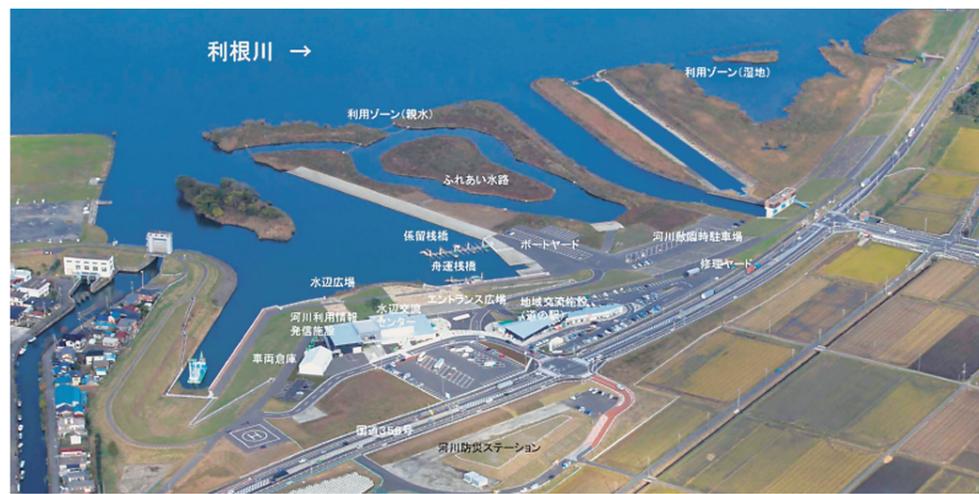
横利根川と利根川の合流点で、利根川の逆流防止を目的として設置された水門です。

C. 水の郷さわら

2010年に開業した、佐原河岸が設けられた「川の駅」と、道の駅や河川防災ステーションがある複合施設で、利根川下流クルーズの拠点として機能しています。国と香取市が協働し、PFI事業により民間の資金と技術力を活用して、一体的な整備と運営が行われています。



※川の駅の係留桟橋



1 横利根開門
横利根開門は大正10年(1921年)に完成した我が国最大級の規模を持つ煉瓦造複開門で、利根川の明治改修事業で唯一現存するシンボリック施設です。横利根開門の設計および施工の水準は高く、我が国における煉瓦造開門のひとつの到達点を示す近代化遺産としての価値により平成12年5月、国の重要文化財に指定されました。



2 十間川親水緑道と桜並木
利根川右岸の水郷大橋下流部から小野川までは、約1.5kmにわたって市が整備した「十間川親水緑道」が続き、春には堤防の桜並木が花見の名所となっています。一番上流寄りには、十間川の浄化をするための噴水や芝生広場のある親水公園も整備されています。



3 佐原の町並み
佐原の町には伊能忠敬旧宅のほか県指定文化財も8件(13棟)が小野川沿いや香取街道沿いに軒をつらねており、当時の面影が今でも残っています。佐原の町はこのような歴史景観をよく残し、またそれを活かしたまちづくりに取り組んでいることが認められ、関東で初めて「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。佐原の「重伝建」は昔からの家業を受け継いで今も営業を続けている商家が多く、「生きている町並み」として評価されています。また、小野川には風情豊かな観光遊覧船も就航しています。



4 津宮鳥居河岸
香取神宮の一の鳥居が利根川に面して立つ津宮鳥居河岸はかつて香取神宮への表参道口であり、江戸時代に香取神宮、息栖神社、鹿島神宮の三社詣での船客が乗り降りして賑わったところです。12年に一度、午年に行われる香取神宮式年神幸祭では、津宮河岸から神輿が御座舟に乗せられ、鳥居河岸には大勢の人が集まります。また、堤防の中段に建つ常夜燈は1769年に奉納されたもので、利根川筋に残るものでは最古の常夜燈であり、市の文化財に指定されています。



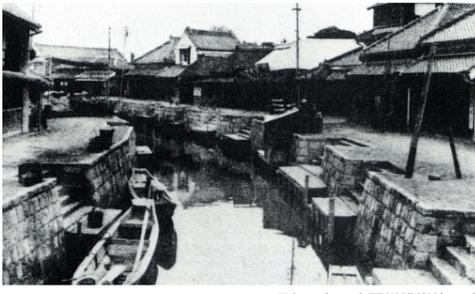
5 香取神宮
香取神宮は伊勢、鹿島と並び、明治以前に「神宮」の称号を与えられていたわが国屈指の名社です。国・県指定の文化財だけでも200点余を所蔵・所有しています。12年ごとの午年に行われる式年神幸祭は、御輿が津宮から御座舟に移り、多くの供奉船をひきいて利根川を佐原市街地沖まで遡る盛大な行事です。また境内には水戸公園手植えの「黄門桜」もあり、現在も花を咲かせています。



6 加藤洲十二橋
定番の水郷観光スポットとして知られる加藤洲十二橋。この辺りはかつて家と家あるいは田んぼの間を、縦横に張り巡らされた水路をつたって舟で行き来していました。今も残る橋の下をゆく加藤洲十二橋めぐりは、船が到着すると田浦の水郷佐原あやめパークにアヤメ・ハナショウブが咲く晩春から夏にかけて特に賑わいます。

地域のこぼれなき

小野川の「だし」
佐原の小野川沿いは、江戸時代に河岸として栄えた場所です。階段状の施設は、物資を荷揚げするための「だし」と呼ばれる施設です。現在でも残されているものを見ることができる他、埋められた跡を確認できる箇所もあります。



昭和10年の小野川護岸竣工時(「ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 佐原・小見川・神崎」(国書刊行会)より転載)

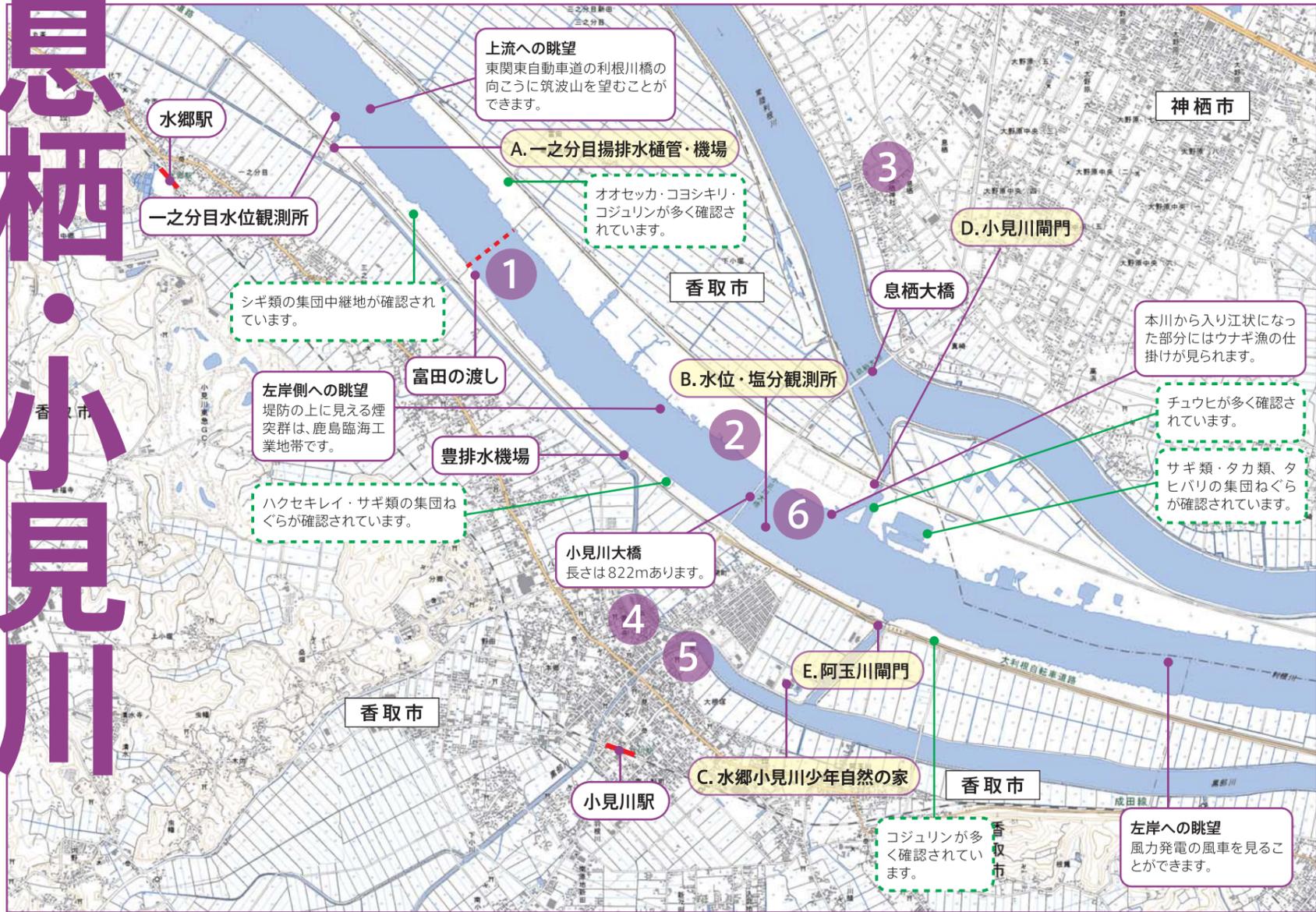
佐原が生んだ偉大な測量家「チュウケイ先生」
17歳の時に佐原の酒造家に娘婿として入った伊能忠敬は「タダタカ」と読みますが、地元の人たちは「チュウケイ先生」と呼んでいます。当時の佐原は高瀬船の往来が激しく、日本各地の情報が寄せられていたことから、チュウケイ先生の心も世界に大きく開かれていったのかもしれない。



肖像・伊能忠敬(部分)(伊能忠敬記念館所蔵)

取手・我孫子
布川・布佐・木下
河内・栄
金江津・滑川
押砂・神崎
佐原・香取
息栖・小見川
東庄
矢田部・桜井町
波崎・銚子

息栖・小見川



船から見える利根川の見どころ



A. 一之分目揚排水樋管・機場
 いちのわけめ
 一之分目揚排水機場は、小堀川の排水と、小堀川下流にある黒部川(貯水池)から取水している施設へ最大14,299 m³/s注水する機能を持っています。黒部川から取水する主な施設は、大利用水(10.33 m³/s)、東総用水(2.235 m³/s)などです。



B. 水位・塩分観測所
 水資源機構の施設で、塩分濃度と水位を自動で測定し、そのデータをテレメータにより管理所に送ります。
 27という数字は、河口からの距離(km)を表しています。広大な下流域を航行する際には良い目印となります。



C. 水郷小見川少年自然の家
 団体生活を通じて青少年の健全育成を図ることを目的とした千葉県青少年教育施設です。
 宿泊や各種学習活動・体験活動のための設備があり、団体での研修やカヌー体験・野外活動・創作活動・プラネタリウムでの星座鑑賞など様々な体験ができます。



D. 小見川閘門
 閘門をくぐり抜けると常陸利根川へ出ます。利根川と常陸利根川の水位調節のために設けられ、船舶の通航ができるようにつくられた構造物です。



E. 阿玉川閘門
 あたまがわ
 黒部川との水位に高低差があるために設置された構造物で、舟運を目的としています。



チュウヒ・タカ類の飛翔
 この付近では、チュウヒやタカ類の飛翔がよく見られます。
 中でもチュウヒは、樹上ではなくヨシ原などで巣作りを行うため、利根川の自然と密接な関係にあります。
 (写真はチュウヒの飛翔 波崎愛鳥会撮影)



1 富田の渡し
 かつては陸続きであった小見川付近の河岸とその対岸は、明治時代の河川改修により分断されてしまいました。富田の渡しは、河川改修により分断された土地に農地を持つ農夫のための農耕専用船として運航されたのが始まりと言われています。このあたりには他にも2つほど渡し船がありましたが、これらは既に運行を取りやめており、最後に残った富田渡船も平成25年3月に運行を終了しました。



3 息栖神社
 千年以上の歴史をもつ息栖神社は、鹿島神宮、香取神宮とともに東国三社のひとつとして数えられた由緒ある神社で、江戸時代から三社詣で賑わってきました。
 常陸利根川沿いにある大きな一鳥居の両脇には小さな鳥居が建っており、それぞれの鳥居の下には忍潮井(おしおい)と呼ばれる四角い井戸のようなものがあります。水底には男瓶、女瓶と呼ばれる2つの石瓶があり、昔は常に淡水がわき出していました。



5 黒部川沿いの町並み
 江戸時代、小見川地区は小見川藩内田氏一萬石の陣屋が置かれ、利根川水運の町として栄えました。現在でも黒部川沿いには木造の商家などが、独特の風情を醸し出しています。
 また夏になると黒部川では「香取市民レガッタ」「水上スキー大会」などの水上スポーツイベントが目白押しに開催されます。



2 小見川大橋周辺の野鳥観察地
 左岸側の遠くに鹿島臨海工業地帯の煙突群が見えますが、この辺りの河岸は多くの野鳥が見られる自然の宝庫です。
 小見川大橋下流域の利根川北岸は、常陸利根川と利根川に挟まれた地域と合わせて広大なヨシ原に覆われた場所です。
 このあたりは、当時日本では東北地方の数ヶ所でしか繁殖が確認されていなかったオオセッカ(危急種)が1984年に確認され、一躍有名になりました。
 オオセッカに限らず、コジュリン(希少種)やコヨシキリ、チュウヒやノスリといった猛禽類などの他の地域ではなかなか見ることのできない野鳥が多数生息している貴重な場所です。



4 初代松本幸四郎の墓(善光寺)
 善光寺境内には、千葉県指定史跡となっている歌舞伎の名優松本幸四郎のお墓があります。歌舞伎役者の初代・松本幸四郎は、小見川町(現香取市)出身者として延宝2年(1674)に生まれました。実業・荒業の立て役が得意で、当時は二代目市川團十郎と並び名優と言われました。
 また、善光寺には恋の願いごとなどがかなえられるという伝説がある「腹切り様」のお墓があり、女性の信仰を受けています。



6 小見川の夏のまつり
 小見川地区には、春の城山公園で開催されるおみがわ桜つじまつりをはじめ、一年を通して様々な祭りや行事があります。
 中でも関東有数の歴史と規模を誇る祭りが、利根川の納涼の開始を祝う川開きの日、毎年8月1日に行われるのが水郷おみがわ水上花火大会です。利根川の川面を利用した豪快な花火は自然の恩恵を受けた水と緑の街ならではのものであり、小見川を象徴する夏の風物詩となっています。

小見川大橋付近で見られる野鳥たち



オオセッカ
 利根川下流域ではヨシ・スゲ群落を好んで繁殖しています。
 環境省レッドリスト絶滅危惧IB類、茨城県版レッドデータブック危急種、改訂千葉県版レッドリスト2006最重要保護生物に指定されています。(波崎愛鳥会撮影)



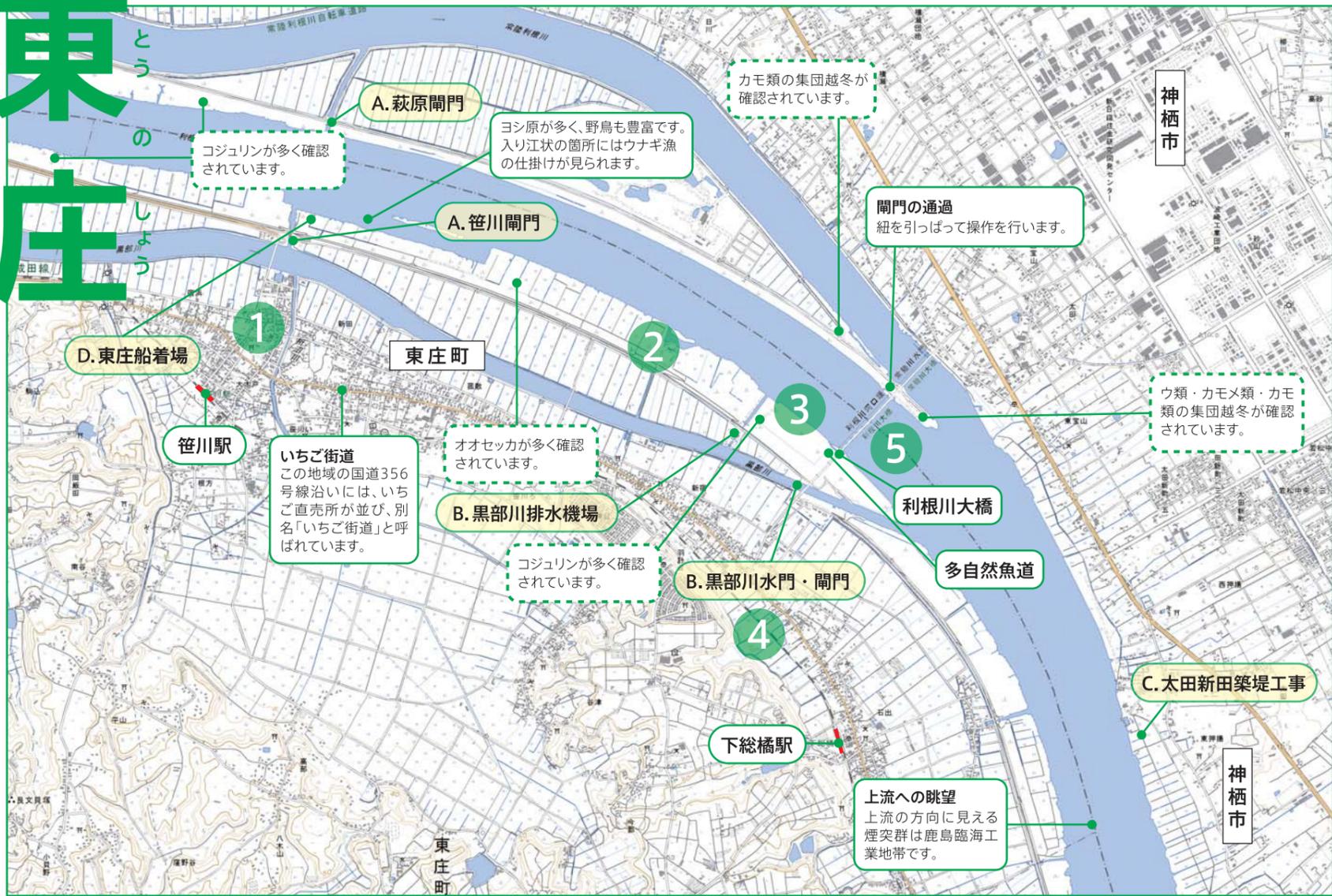
カワウ
 利根川下流域全域で見ることができますが、特に佐原から下流域で多く確認されています。近年急速に増加し、分布域も拡大しています。
 改訂千葉県版レッドリスト2006一般保護生物に指定されています。(波崎愛鳥会撮影)



コヨシキリ
 河川敷の草地に見られます。
 茨城県版レッドデータブック希少種、改訂千葉県版レッドリスト2006一般保護生物に指定されています。(波崎愛鳥会撮影)

取手・我孫子
 布川・布佐・木下
 河内・栄
 金江津・滑川
 押砂・神崎
 佐原・香取
 息栖・小見川
 東庄
 矢田部・桜井町
 波崎・銚子

東庄



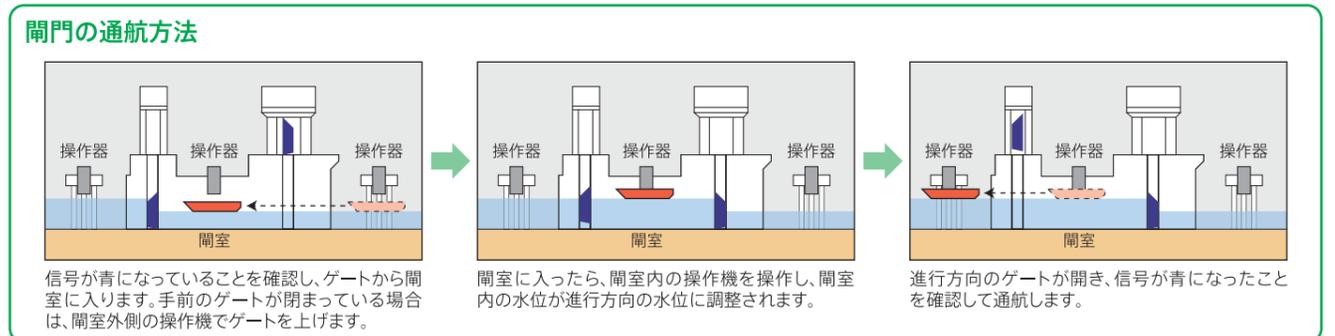
船から見える利根川の見どころ

A. 笹川閘門と萩原閘門
この付近は常陸利根川、利根川、黒部川が並行して流れており、川魚漁などの船の往来も多い箇所、利根川本川に向かい合って2つの閘門が設置されています。写真は右岸側の笹川閘門です。

C. 太田新田築堤工事
利根川下流部左岸の河口から約16km付近に位置する神栖市太田地区は、堤防が未整備なことから平成10年、13年、14年と浸水被害が頻発しています。河道掘削による浚渫土を利用した築堤盛土で、無堤防地区における浸水被害を効果的に防ぐ工事を進めています。

B. 黒部川排水機場(上)と黒部川水門(下)
黒部川は香取市の旧山田町及び旧小見川町の区域、そして東庄町を経て利根川へ合流する1級河川です。黒部川排水機場は利根川と黒部川の合流付近に位置し、黒部川流域の洪水時における内水排除を目的に建設されました。黒部川の水位がY.P.150mを超える時、排水を開始します。なお、黒部川水門には閘門が設置されています。

D. 東庄船着場
平成22年に完成した新しい船着場です。近くにある笹川閘門を使えば、船に乗ったまま黒部川へも行けます。船着場は東庄町が管理しています。



1 笹川河岸と諏訪神社
かつて笹川寄航場にあった旅館。ここから軽(はしけ)が出て、利根本流の蒸気船まで荷客を運んでいた。(「利根川勝地案内」(物流博物館所蔵))

桁沼川が黒部川へと注ぐ東庄町笹川付近は、かつて笹川河岸として賑わいを見せ、講談や浪曲で有名な天保水滸伝の舞台になったところ。諏訪神社には侠客・笹川繁蔵が建てた、相撲の元祖・野見宿禰(のみのすくね)の碑があります。そのため諏訪神社では、町内の相撲大会や大相撲の夏合宿など、相撲にちなんだ行事が行われます。笹川は蒸気船の寄航場ともなり、かつて荷客取扱所を兼ねていた旅館は、建て替えられてはいるものの現在も宿泊することができます。

2 利根川コジュリンこうえん
東庄町菰敷(こもしき)地先にあるこの公園は、利根川近代治水工事発祥の地で、利根川子どもサミットにおいて、子どもたちが描いた「利根川の大自然と水に親しむ」という夢を、国土交通省と東庄町が実現したものです。公園の名前になっているコジュリンとは、湖沼周辺や河川川地味などに生息する小型の鳥で、生息数が減少傾向にある貴重な鳥です。堤防上には、利根川第一期改修発祥の地の石碑と、利根川治水百年記念のモニュメントも設置されています。

3 魚道とサケ・アユの遡上
利根川河口堰付近には、アユやサケなどのように回遊する習性をもった魚たちがたくさんいます。この魚の通り道になるのが、左右両岸に設置された魚道です。元の魚道は「呼び水式階段魚道」で、ゲートが閉鎖しているときに主に小型魚~中型魚に利用されるものです。底生動物や遊泳力の弱い魚も遡上できるように、右岸側の既存の魚道の外側に、図に示すような勾配の緩い多自然魚道が新たに設置されました。

新しく設置された多自然魚道

上流の利根大堰のデータでは、サケの遡上数は年々増加の傾向にあり平成21年度には9千匹以上が確認されています。アユの遡上数は年による変動が大きいものの、近年では毎年数十万から百万匹以上の数が確認されています。

4 石出からの眺め
石出という地名は、赤松宗旦の「利根川図志」という本に次のように紹介してあります。「此所は利根川へなり出でたるころにて、常陸原の砂山と相對し風景至つてよろし」さらに「利根川図志」には石出からの眺望が描かれています。江戸時代当時は石出から対岸の砂山の丘陵が良く見え、利根川越しに眺めるその風景はたいへん素晴らしかったことが分かります。現在では砂山の丘陵は整備され、鹿島臨海工業地帯の一部である波崎工業団地に姿を変えてしまいました。当時の雄大な景色は失われ、利根川からは工場の煙突が建ち並んでいるのが見えます。

5 利根川河口堰と周囲の水門・閘門群
利根川河口堰の付近では、写真の左側(南側)から、黒部川、利根川、常陸利根川の3つの川が合流しています。利根川の下游地域は、川の勾配がともなだからであることが特徴です。そのため長期間雨が降らず川の水が少なくなると、水が逆流し塩害がおこってしまいます。利根川河口堰、黒部川水門、常陸川水門は、この塩害を防ぎ水を有効利用する重要な役割を担っています。

黒部川の黒部川水門、利根川の利根川河口堰、常陸利根川の常陸川水門には、それぞれに船が安全に往来できるように左岸側に閘門という船通しがあります。通航させる仕組みは有名なバナマ運河の方式と同じで、いったん閘門に入った船を、ゲート操作によって上下流の水位に合わせて通航します。常陸川水門は堰堤の長さが約265mあり、日本最大の水門で、「逆水門」とも呼ばれています。利根川に架かる橋は長さ834mの利根川大橋です。

東庄付近で見られる野鳥たち

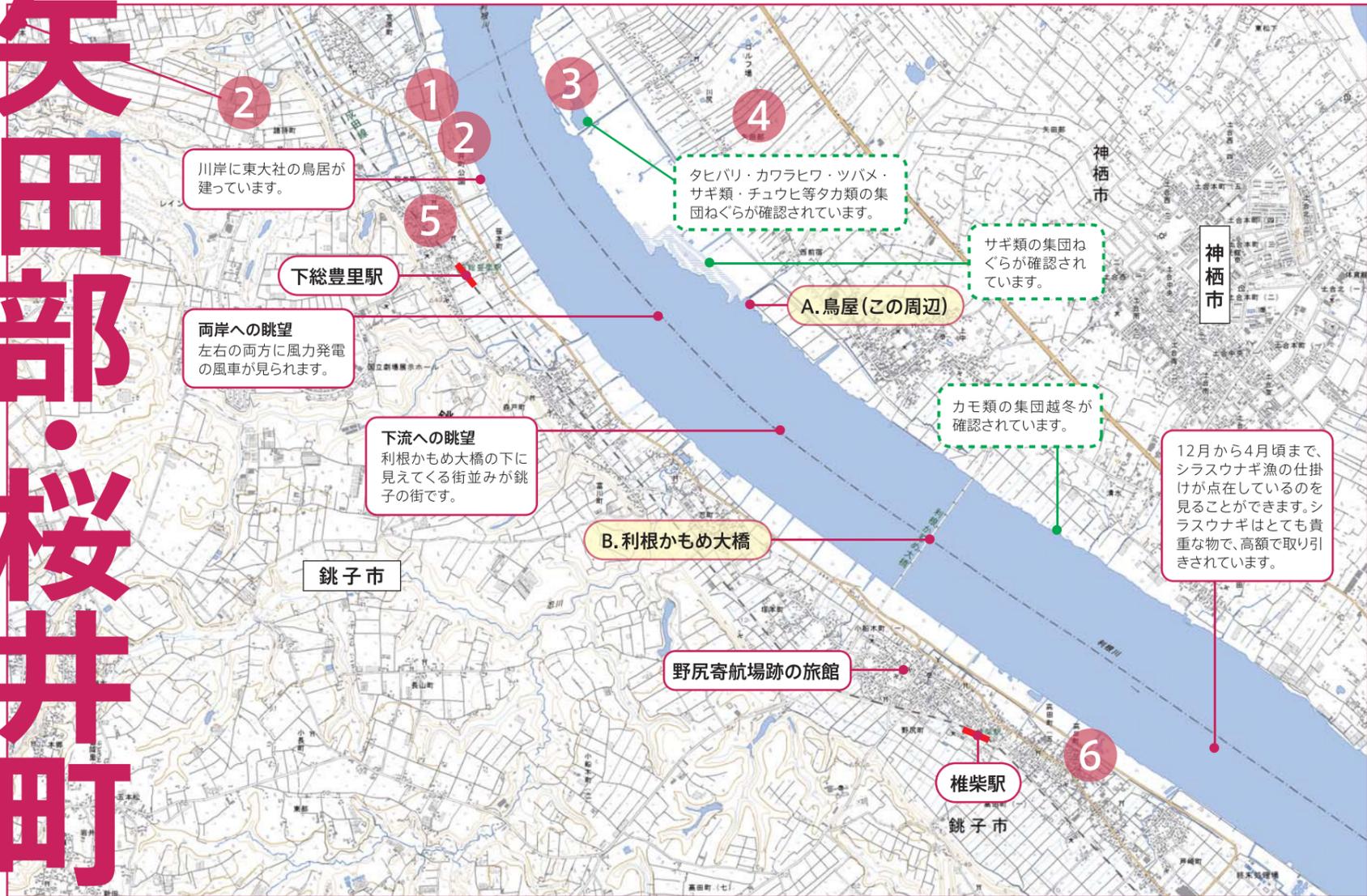
クイナ
この地域には冬鳥として訪れ、個体数は少なく、ヨシ原等の湿性草地に生息します。大変用心深く、その姿をじっくり見ることは困難とされています。改訂千葉県版レッドリスト2006最重要保護生物に指定されています。(波崎愛鳥会撮影)

チュウシャクシギ
茨城県では春の渡り期に利根川下流周辺の湿地で比較的大規模なねぐらをとっている他、秋にも見られます。改訂千葉県版レッドリスト2006一般保護生物に指定されています。(波崎愛鳥会撮影)

コジュリン
広い草原やヨシ原・湿地で繁殖します。東庄町のイメージキャラクター「コジュリンくん」にもなっています。環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類、茨城県版レッドデータブック希少種、改訂千葉県版レッドリスト2006最重要保護生物に指定されています。(波崎愛鳥会撮影)

取手・我孫子
布川・布佐・木下
河内・米
金江津・滑川
押砂・神崎
佐原・香取
息栖・小見川
東庄
矢田部・桜井町
波崎・銚子

矢田部・桜井町



2 川岸に東大社の鳥居が建っています。

5 両岸への眺望
左右の両方に風力発電の風車が見られます。

下流への眺望
利根かもめ大橋の下に見える街並みが銚子の街です。

B. 利根かもめ大橋

野尻寄航跡の旅館

椎柴駅

3 タヒバリ・カワラヒワ・ツバメ・サギ類・チュウヒ等タカ類の集団ねぐらが確認されています。

サギ類の集団ねぐらが確認されています。

カモ類の集団越冬が確認されています。

6 12月から4月頃まで、シラスウナギ漁の仕掛けが点在しているのを見ることができます。シラスウナギはとても貴重な物で、高額で取引されています。

A. 鳥屋(この周辺)

船から見える利根川の見どころ



A. 鳥屋
左岸側の川岸に、鴨を鉄砲で撃つための隠れ小屋が見られます。これらの小屋は、河川の一時占居用を毎年出して、設置・撤去をしています。11/15~2/15が猟期ですので、散策の際は気を付けて下さい。

B. 利根かもめ大橋
「人と自然にふれあう躍動感ある橋」をテーマに、カモの羽ばたきをイメージした橋。平成12年3月開通の有料道路で普通車200円、ゆとりのある歩道も整備されています。長さは1,150mあります。



クロツラヘラサギ
世界的にも稀少な鳥で、環境省レッドリスト絶滅危惧IA類に指定されており、冬季に利根川の河口域で確認されることがあります。(波崎愛鳥会撮影)



ウミウ
千葉県では数少ない冬鳥で、その個体数は減少傾向にあり、「改訂千葉県版レッドリスト2006」の重要保護生物に指定されています。(波崎愛鳥会撮影)



1 桜井町公園
銚子市と東庄町の境界近くの利根川高水敷に整備されているのが桜井町公園です。市営の総合グラウンドとして整備されており、各種のスポーツに利用されています。また、川辺での釣りや散歩など、市民の憩いの場としても利用されています。



2 東大社の御神幸・式年銚子大神幸祭
桜井町公園の最下流部の川岸には川へ向かって木の鳥居が建っています。これは東庄町にある東大社(とうだいしゃ)にて2年に一度行われる、「桜井御神幸」で神輿が利根川へお浜降りするためのものです。また、川辺での釣りや散歩など、市民の憩いの場としても利用されています。また、東大社で20年に一度行われる式年銚子大神幸祭は、大名行列など総勢2千人以上が3日ばかりで外川漁港まで練り歩く、東総地方最大級の祭りです。その由来は、昔、海上が荒れて漁ができずに困っていたとき、東大社から高見浦へ御神幸を行ったところ、たちまち海が穏やかになり、米作も豊作となったことからきています。



3
広大なヨシ原が広がる川尻地先の自然地



4
生垣と屋敷林の家屋

矢田部川尻地先の自然地
神栖市の利根川左岸に位置し、川へ張り出したようになっていた辺りを矢田部川尻地先といいます。矢田部川尻地先には広大な河川敷が広がっており、春と秋にはシベリアと赤道付近を往来するチドリ類やシギ類が立ち寄りします。付近では他にもサギ類やヒスイ色の美しい鳥、カワセミの姿もみられます。

神栖市矢田部の屋敷林と生垣の集落
矢田部から川尻のあたりには屋敷林やマキの生垣に囲まれた家屋が多く見られ、特徴的な集落景観を呈しています。これらの木々は、強い風から家屋を守る他、鹿島灘から飛来する砂を防ぐ防砂の役割も果たしています。



5 菅原大神(子産石)
菅原大神は桜井町にあり、「学問の神様」菅原道真を祀る神社です。この社に保管されている子産石を抱くと子が授かるといわれています。1985年のNHK朝の連続ドラマ「濁くし」で紹介されて以来有名になり、現在では全国各地から多くの女性たちが子授け祈願と御礼参りにやってくるようになりました。



6 高田町の蒸気船跡と船溜まり
蒸気船とは、利根川での水運が盛んであった明治時代に利根川下流で営まれていた蒸気船の宿のことです。銚子漁港の上流、高田地区の川沿いには、高田河岸とよばれる蒸気船や高瀬船の船溜まりがありました。しかし通運丸は昭和初期に廃止となり、舟運の衰退とともに高田河岸は姿を消しました。

地域のこぼれ話

運輸会社の社旗
高田河岸には明治期より通運丸が寄港しており、運輸会社の分社が置かれました。写真はその分社の社旗です。このような社旗は、いろいろな写真や絵画などで確認できます。ローマ字のEはEXPRESSのEです。この、通運丸を運航していた運輸会社は、現在のある大手運輸会社の前身にあたる会社です。通の字のマークは、どこかで見た記憶がありませんか？



内国通運会社高田分社旗(宮城喜明氏所蔵)

野尻寄航跡の旅館
かつて蒸気河岸の荷客取扱いを行っていた家は、水上交通の衰退とともに違う仕事を行うようになっていきました。しかし、旅館を経営していた寄航場の中には、現在も生業を続けているところが何軒か存在します。野尻河岸で蒸気船を営んでいた旅館は、建て替えられてはいるものの、現在でも国道356号線沿いで旅館業を営んでいます。



かつての野尻荷客扱所(「利根川勝地案内」(物流博物館所蔵))

取手・我孫子
布川・布佐・木下
河内・米
金江津・滑川
押砂・神崎
佐原・香取
息栖・小見川
東庄
矢田部・桜井町
波崎・銚子

波崎・銚子



神栖市

両岸への眺望
この辺りから下流側には高い堤防が無いことから、川から両岸の街並みが良く見えます。

カモメ類・ウ類の集団ねぐらが確認されています。

船の難所
河口部は潮流と利根川の水流がぶつかり大きな三角波の立つ船の難所です。

コアシサシ・コチドリ・セイタカシギの集団繁殖が確認されています。

カモメ類・ウミウ類の集団越冬が確認されています。

C. 銚子ポートタワー

松岸駅

B. 銚子大橋

川口の鯨解体所跡

松岸河岸跡

E. 銚子船着場

D. 銚子市役所

3

本城ドック

5

銚子市

銚子駅

飯沼観音(飯沼水準原標石)

0 1km

船から見える利根川の見どころ



A. 利根公園
利根川沿いの埋立地につくられた公園で、健康づくりのためのランニングコース、芝生を植えた大きな広場などがあり、地域の人々のスポーツと憩いの場となっています。
また、園内には河童の図で有名な小川芋銭(うせん)の句碑もあります。



C. 銚子ポートタワー
銚子漁港には多くの水産関連の加工場や倉庫が立地しています。それらの屋根越しに見えるガラス張りの塔が銚子ポートタワーです。展望室からは雄大な太平洋や漁船の出入り風景を楽しむことができます。



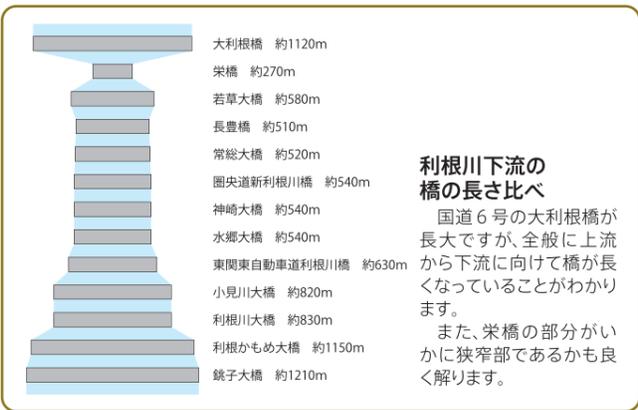
E. 銚子船着場
平成22年に完成した浮き桟橋形式の新しい船着場です。潮の満ち干きに合わせて船着場自体が上下するので、船への乗り降りがしやすいという特徴があります。
銚子市が管理しています。



B. 銚子大橋
利根川最下流に架かる橋梁(斜張橋)で、千葉県銚子市と茨城県神栖市を結びます。長さは1,208mあります。



D. 銚子市役所
最上階の8階はスカイラウンジとなっており、利根川への眺望は抜群です。



1 波崎の旧渡船場
河口近くには、明治時代から波崎町(現神栖市)と銚子市を結ぶ唯一の交通手段として活躍した渡船の発着所がありました。しかし昭和37年に銚子大橋が開通してからは利用客が落ち込んでしまい、平成8年に人々に惜しまれながら廃止となりました。渡船場跡には現在、河畔プロムナードと呼ばれる約1100メートルの散歩道が整備されています。



2 銚子と醤油
銚子は漁業の町であるとともに、醤油の町でもあります。銚子は温暖な海洋性気候と、利根川を利用した水運が盛んであったことから、醤油の醸造が盛んに行われるようになりました。現在でも数社が醸造を行っており、内1軒の大正4年の仕込み蔵の増設時に造られたレンガ塀は、当時の面影を残す歴史的に貴重な景観となっています。



3 銚子漁港
江戸時代初期、海上航路の廻船の寄港地・避難港として利用されたのが銚子漁港のはじまりです。その後、利根川から江戸川を結んだ水路が開通して利根川水運が盛んになるにつれて、銚子漁港は全国各地から海上航路で運ばれてくる積荷の、川船への積替地として発展しました。今日では、銚子の沖合が暖流と寒流が交差する好漁場ということもあり、全国屈指の水揚げ高を誇る漁港として知られるようになりました。銚子漁港及びその周辺では多くのカモメ類を見ることができ、大変珍しい種類のカモメが確認されることもあります。



4 千人塚
慶長19(1614)年10月に銚子を襲った津波のため、多数の漁師が犠牲になるという事故がありました。その時の犠牲者を葬ったのがこの千人塚です。当時の利根川河口付近は、船の通れる川幅が狭い上に干潮時の潮の流れが急で、「阿波の鳴門が銚子の川口、伊良湖渡合が恐ろしや」と船頭歌にうたわれるほどの海の難所でした。



5 飯沼観音(飯沼山圓福寺)と飯沼水準原標石
銚子市の中心地にある圓福寺は坂東三十三観音第27番札所です。古来飯沼観音とも呼ばれ、信仰をおおいに集め、銚子の市街は飯沼観音の門前街として発展しました。映画館や料理店などの繁華街に囲まれた観音堂は、常に人々に賑わっています。



飯沼観音の境内の一角に、柵に囲われて保存されている石があります。これは、水準原標石と言い、水準測量(高さを測る測量)を行う時の原点となる点のことです。利根川、江戸川の水準測量を開始する時にオランダ人技師のリンダは、千葉県銚子市にある飯沼観音内に水準原標石を設置し、これを基準に飯沼水位尺(量水標)の基本水平面を日本水位尺(J.P.)と名付けました。ここから、利根川、江戸川の基本水平面(Y.P. 0.0m)の高さや荒川の基本水平面(A.P. 0.0m)の高さが決まり、現在の河川における基準高となっています。

地域のこぼればなし



川口の鯨解体所 (「ふるさと想い出 写真集 明治大正昭和 銚子」(国書刊行会)より転載)

川口の鯨解体所
現在の川口神社下には、かつて捕鯨会社の出張所が設けられ、捕鯨船も配属されて捕鯨が行われていました。写真は射とめた鯨を解体しているところで、鯨の腹の上に太刀を持った漁民の姿を見ることができます。撮影は明治末以降のものと思われる。



「下総名勝図絵」に描かれた松岸河岸跡 (「下総名勝図絵」(国書刊行会)より転載)

このガイドに掲載された地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである。(承認番号 平25情復、第905号) これらの地図を複製する場合には、国土地理院の長の承認を得なければならない。

取手・我孫子
布川・布佐・木下
河内・米
金江津・滑川
押砂・神崎
佐原・香取
息栖・小見川
東庄
矢田部・桜井町
波崎・銚子

利根川下流を知る

～舟がつなげた川と暮らし～

平成26年3月

発行：利根川下流河川事務所